

チェルノブイリで被曝したロシア兵

ロシアによるウクライナ侵攻は一時も早く終えなければならない。ウクライナ市民の被害はもとより、ロシアの兵士にとっても悲劇をもたらすものでしかない。チェルノブイリで被曝したロシア兵たちは今後、36年前の事故処理作業者らと同じ運命をたどる事になる。

初日からチェルノブイリを管理下に

2月24日にウクライナ侵攻を開始したロシア軍は首都キエフ陥落を狙い、ベラルーシから侵攻し、初日からチェルノブイリ原発を制圧し管理下に置いた。チェルノブイリは首都キエフまで車で約3時間、ここを拠点に首都を攻めようとした。チェルノブイリ原発の職員211名は通常の時間交代が許されず、3月31日にロシア軍撤退までの間、厳しい管理下に置かれた。その間に原発の外部電源を切られ、使用済み燃料冷却が出来なくなる恐れ等の問題も起こった。

「赤い森」に滞在したロシア兵

しかし、チェルノブイリに侵攻した約4千名のロシア兵たちはもっと厳しい状況下に置かれた。原発の西側に広がる「赤い森」に3月31日の撤退まで滞在させられたのである。「赤い森」とは1986年4月26日に爆発したチェルノブイリ4号炉から飛散した膨大な放射性物質で松の木が枯れ死に、森全体が赤く染まったまま今も立ち入り禁止区域となっている所である。広さは約400ヘクタール。放射能汚染レベルは場所により違うが、2020年の測定では15~600 μ Sv/h(毎時マイクロシーベルト)だった。兵士らはこの森の中の2個所で塹壕を掘り、約1か月間、汚染した枯れ木で焚き火をし暖を取り、食事をし、眠った。当然、木々だけでなく土壌も放射能で強烈に汚染しており、そこに穴を掘れば汚染した粉塵を吸い、焚き火をすれば汚染した煙を吸う。強烈な内部被曝は避けられない。ま

た3月28日には近くで森林火災が発生した。アメリカのNASAはキャンプ場周辺の火災を空から撮影している。火災が自然発火なのか兵士の炊き火が原因だったかは不明である。何れにせよ内部被曝は避けられなかった。

ロシア軍兵士らの被曝

兵士らは当然、強烈な外部被曝も内部被曝も受けた筈である。被曝の実態は不明だが撤退前日の3月30日に、このキャンプからロシアのマークVと赤十字マークを付けたPAZバス(ロシアのノボグラードに拠点を置くバス会社名)7台が、ベラルーシのゴメリにある医療施設に約400名の兵士を運んだ。この病院は「ベラルーシ国立科学-放射線医学と人間生態学のための診療機関」と確認されている。被曝した兵士らの治療が目的だったと思われる。原発周辺の放射線レベルは、ロシア侵攻前は9.46 μ Sv/hだった(IAEAによる)が、撤退後は65 μ Sv/hに跳ね上がっていた(ウクライナ政府)。戦車や車両が走り回り土壌粉塵をまき上げ、汚染した木材を燃やしたのが原因と思われる。今後当分は原発職員も被曝増加のリスクを免れない。特に、兵士達を被曝させたロシア軍指揮官の責任は重い。

(引用文献: The SUN, New York Post, Leuters, Center for Information Lesilience, INVERSE 等)。

(2022年5月4日 河田)